

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(みちびき・はぐくみ)

『「世界遺産 日光の社寺」を次世代の子どもたちへ』 キャンペーン」事業

伝統文化を学び、ふれあうワークショップを通して 子どもたちが地域の文化財保護への理解を深める契機に

日光の世界遺産「日光の社寺」。下野新聞社を中心にした実行委員会が、子どもたちを対象に3つのワークショップを日光二荒山神社、日光東照宮、日光山輪王寺で開催した。次世代が日光の伝統文化とふれあい、貴重な文化遺産をより身近に感じる機会となった。



日光二荒山神社での「巫女体験」



日光東照宮での「流鏝馬木馬稽古体験」

世界遺産日光の2社1寺に伝わる 伝統文化を子どもたちが体験

開山1250年を迎え、日光では様々な記念行事が行われるなど盛り上がりを見せるとともに、東日本大震災以降低迷していた国内外からの観光客も戻りつつある。しかしその一方で、遠足など校外活動以外では日光の社寺を訪れない子どもも増えており、さらに地元民でありながら世界遺産である日光の社寺についてよく知らないまま大人になる子どもたちも多い。

『「世界遺産 日光の社寺」を次世代の子どもたちへ』キャンペーンは、次代を担う子どもたちの文化財保護への理解を深め、伝統文化を継承する人材の育成を目的に企画された。「文化遺産は地域の魅力を発信する大きなコン

テンツであり、これを保護し継承していくことは地域づくりにもつながります。行政だけに頼るのではなく、民間も共同で取り組む必要があります」と、事務局を務めた下野新聞社営業局の高橋正浩さん。キャンペーンでは、文化遺産の価値を子どもたちに実感してもらうため、伝統文化を「見て、触れて、親しむ」ことをメインに位置づけた。スタートに合わせ2016年4月に発足した実行委員会には世界遺産を構成する2社1寺が参画し、それぞれの社寺の伝統と特徴を生かし、日光二荒山神社「巫女(みこ)体験」(7月26日、16名参加)、日光東照宮「流鏝馬(やぶさめ)木馬稽古体験」(8月3日、54名参加)、日光山輪王寺「写経体験・三仏堂の大修理見学」(8月9日、26名参加)という3つのワークショップが実現した。

体験の様子を再録紙面で紹介 広く県民読者に話題提供

ワークショップ開催は夏休み期間中で、また世界遺産での開催とあって関心が高く、子どもたちはもとより家族からの応募も多かったため急きょ参加枠を増やしての対応となった。当日は、カメラ持参で多くの家族が集まり、また子どもたちが真剣に体験する微笑ましい様子を写真に収める観光客の姿も見られた。そのなかには、日光二荒山神社で拳式したという高齢夫婦がいて、思い出の神社で巫女装束を身にまとった孫娘を嬉しそうに見守る姿はとても印象的だったという。参加した子どもたちからは、「普段できない体験ができて楽しかった」、「伝統文化をわかりやすく体験しながら知ることができてとても満足した」、「また参加したい」という声が寄せられた。

「限られた時間ながら、身近にある日光の社寺の重要性を理解していただけたと思います。この体験を通して家族の間に会話が生まれたり、参加した子どもが大人になった時に自分の子どもに話して聞かせたり、伝統文化への理解が世代を超えて引き継がれていったら嬉しいです」。キャンペーンを振り返り、高橋さんは期待を込める。

なお3つのワークショップの様子は、下野新聞2016年8月30日付け朝刊に再録紙面で紹介。参加者や参加できなかった子どもたちに体験の様子を伝えるとともに、さらに多くの県民読者に話題を提供し、地元の世界遺産を守っていく意識付けを図った。キャンペーンは1年間でいったん終わり、文化遺産の保護・継承に向けての活動は、2社1寺それぞれが独自の取り組みをこれからも続けていくが、条件が整えば定期的な開催を考えていきたいという。



日光山輪王寺での「写経体験」



下野新聞に掲載されたワークショップの再録記事

助成団体:『「世界遺産 日光の社寺」を次世代の子どもたちへ』キャンペーン実行委員会



地域の子供たちが世界の宝を理解する契機になりました

AJOSCの助成により、多くの参加者の受け入れと紙面露出を図ることができ、初の試みを成功のうちに終了することができました。地域の子供たちには世界の宝を再認識する大きな契機になったと思います。文化財の保護、伝統文化の継承は息の長い取り組みが必要です。今後ともご支援をいただければ幸いです。

『「世界遺産 日光の社寺」を次世代の子どもたちへ』キャンペーン事務局
下野新聞社 営業局営業部 部長代理 高橋正浩さん